

# 「芝居」と云う名の空間

堂 本 正 樹

芝居。

……現在「演劇」のことを、砕けてこう云っている。「お芝居」とはその丁寧語だが、或る懐かしさを思わせる。

芝居者と云えば、演劇関係者の総称だが、自らへり下ったニュアンスがあり、その以前には、明らかに差別意識を含んだ蔑称だった。手近な『広辞苑』を見ると、「しばい」の①に、「芝生に居ること。又は芝のはえた所。芝生」とある。これが義着であること、明らかだ。

古典文庫の『室町時代物語』の1に載る『むらまつ物のかたり』に、

——しばいに、おうまく、うちまはして、七日のさかもりを、はしめける（芝居に横幕打ち廻して、七日の酒盛りをぞ始めけ

る）

とあって、草の生えた地べたでの酒盛りが、当時普通だったのが分かる。

これは武士のものだが、地面に座るのは、本来庶民こそがふさわしい。

能の『飛鳥川』は、現在金剛・喜多の両流のみにある狂女物だが、類型に従った改作度が強く、西野春雄補の『古今謡曲解題』の「古今謡曲一覽」の「あ」のように、「●飛鳥川甲○飛鳥川乙」と分けるのが正しいだろう。●は「室町時代成立と確定し得る曲」であり、○は「室町時代成立と推定し得る曲（室町末から江戸初期へかけての曲も若干含む）」とある、現在のそれは、文体的に江戸初期の改作だろう。

●はシテが若い娘で、脇僧は娘を誘拐され

て出家した父。田植えの宴会で、早乙女姿の娘と再会する。文体は『求塚』に共通した感觸で、確実に室町前期の作だ。

「古典文庫」の『未刊謡曲集』の十八の『飛鳥川』はこの●だ。

——わき「のふ／＼さうとめ達。先々休んで酒をも参り候べし。して芝居に並居てあの御今参りの筑紫人にも、殊更御珍らしく候へば、皆々芝居に居流れて、くこんのうでめでたふ御田植の祝事にも捧げ給へ。なお改作の現行は、シテは母で子を尋ねており、子は脇が伴っている。娘でこそ労働力として誘拐される世相が知れるのである。勿論この独特の文章も無い。

この文章は、東博蔵の重要美術品『月次風俗図屏風』の田植図にも通う。この田楽の、

白・黒の翁が田植えを祝い躍る絵は、現在芸能史の挿絵に、無くてはならぬ一枚になっている。

苗を植える泥田の中では無く、畔の芝での田楽。芸能史に出る「芝田楽」は、しかしこの事では無く、舞台では無く地面でする田楽の総称らしい。

岩波の「新日本古典文学大系」の『室町物語集上』の『あしびき』（絵巻の言葉書き）には、

——芝田楽の庭の鼓は、下化衆生の誓をす。とあり、脚註に「神社の前庭などの芝地で演ずる田楽」とある。

こうした芝に居て演じ、または見る芸能が「芝居」になるのは当然だった。

金春禅竹の『六輪一露之記』に、「此段関白一条殿（兼良）御筆」なる部分があり、そこに、

——今の世の猿楽は、俳優戯遊の態なりと云へども、棧敷に見る人無く、芝居に聞く者無ければ、一声一曲も芸を失ふ。

と見える。当時猿楽は仮設舞台を中心に、回りを馬蹄型に棧敷で囲んだ。棧敷が前売りの貴賓室であり、舞台上に近い地面が「芝居」で、入れ込みの大衆席であった。ここを「土

間」とも云うが、近いから謡が良く聞こえる。当時の謡は大衆相手の歌謡曲だった。棧敷は遠いから、教養ある人が聞こえなくても筋を知り、見たのだ。一条兼良の言葉はそれを教える。

現在は二階三階があり、「大向う」とはここだが、嘗ては土間の安い入場料の席に庶民がいた、大勢入ると押せ押せになり、尻や膝が苦しいから、安いのである。

前記「お芝居」の語は「信長公記」に見えるが、この土間の敬称である。天正十年の五月十九日に、家康を饗応する信長が、幸若の舞と梅若の能を見る時の描写だ。これで棧敷と芝居の区別が良く分かる。

——御棧敷の内、近衛殿・信長公・家康公・穴山梅雪・長安・長雲・夕閑・友閑。御芝居は御小姓衆・御馬廻・御年寄衆、家康公の御家来衆ばかりなり。

「棧」と「芝居」の階級差。

この棧敷から、舞台上に希望を述べることもあった。貴人の「お好み」に等しいリクエスト。

雑誌『能楽』の大正七年一月号の坂元雪鳥の「読書の後」十九に、小寺玉晁の『連城亭随筆』の四がある。その「△芝居は見物席」

に、

——閑田次筆に曰く。劇場を俗に芝居といふは、昔芝にて技をした為であらう。然るに老人雑話には、観世小次郎が一の弟子に堀江宗雪といふ者があつた。二日の能に張良を二度芝居から所望したから、宗雪にさせたと書いてある。是で見ると舞台上に対して見物席を芝居といったものに見える。後世一転したものであらう云々——と。

御能（城中の能）の折りに町人や百姓を白洲に召して見物仰せつけられるのを芝入りといふが、是も同じ意味であらう。

舞台に対するのでは無く、棧敷に対して芝居と云うのは、前に書いた通りだ。……ここではワキの能「張良」を、大衆の希望でシテがした事が知られる。

こうした大衆席としての「芝居」が、土の上でする芸能の名残りとなり、後々まで「小屋」と呼ばれたように、当初床と屋根裏に板を許されなかった歌舞伎が、芝居と成って行くのであらう。

道での宴会。それが本来の芝居であつたが、現在の劇は、路傍の享楽と何と遠くなったものか。